

# 新宿区大久保における観光地化の在り方に関する研究

井澤 和貴（法政大学大学院 政策創造研究科）

Keyword：新宿区大久保 観光地化 多文化共生

## 【背景】

2019年12月末の外国人人数(外国人登録者)は、約263万人に上る。外国人の日本への移住は、第二次世界大戦以前では労働者確保による移住に始まり、戦後は出稼ぎや企業の進出、近年では出入国管理及び難民認定法の改定により、日本への移住が活発になった。

そして、外国人増加の過程で、都市の中に外国人集住地域が形成されたケースも見られた。新宿区大久保は、日本語学校の存在や外国人コミュニティの存在により、韓国出身者を中心とした外国人が増加をした。

外国人集住地域では、新しい住民である外国人と、すでに住んでいる住民が、互いの文化を理解し、尊重しようという「多文化共生」が求められてきた。多文化共生について、総務省では、「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義し、地域に存在する「異文化」を積極的にまちづくりに取り入れてきたケースもある。

このような外国人集住地域では、地域に存在する異文化によって観光地化するケースが見られた。観光現象として、アーリ(1995)、「観光とは、日常から離れた景色、風景、町並みなどに対してまなざしを投げかけること」としているが、日本人にとって、外国人集住地域という異文化は非日常であり、それを目的に外国人集住地域に出向く人も多い。

中でも、韓国比率の高い新宿区大久保は、2000年以降、ワールドカップ、テレビドラマ、韓国人アーティストによる音楽(K-POP)が追い風となって、観光地化された。その後、外交関係により客足の変動は見られたものの、現在でも、韓国料理や、韓国関連の商品を扱う店が数多く出店し、週末には観光客でにぎわっている。

また、在日ブラジル人比率の高い群馬県大泉町や静岡県浜松市では、「日本の中のブラジル」とされ、サンバコンテストも開催されている。同様に、東京都江戸川区西葛西においても、在日インド人コミュニティが、日印交流を目的としたイベントが開催され、日本にいなながらインドの文化を体験することができる。

観光客が増加した結果、地域では人通りが増え、活気

づくなどの効果が見られた。一方で、外国人集住地域における観光地化は、日本人・外国人の両ホスト側にネガティブなインパクトを与えるケースもあった。新宿区大久保では、2013年頃より日韓関係の悪化により、ヘイトスピーチが発生した。つまり、外国人集住地域では、しばしば外交や、コンテンツの流行など外的な要因に左右されるケースが見られたといえる。他にも、急激な観光地化は受け入れ態勢が不十分なまま観光地化をしたため、道路の混雑などの問題も発生している。

そして、2020年の新型コロナウイルス感染症によっては、再度客足が遠のき、地域の衰退化という課題も考えられる。

本研究は外国人集住地域における多文化共生の実態を調査した上で、新宿区大久保の観光地としての在り方について、明らかにする事を目的としたものである。

## 【研究方法】

本研究は、現地調査と新宿区役所において行ったインタビュー調査によるものである。

現地調査では、韓国に関連した機関や商店、飲食店が多く集まる新宿区大久保一丁目・二丁目を調査対象とした。

新宿区役所にて行われたインタビューでは、新宿区地域振興部多文化共生推進課と文化観光産業部文化観光課を対象とした。

この調査を踏まえて、新宿区大久保に拠点を構え、メンバーは韓国にルーツがある人が中心となっているNPO法人に対してインタビュー調査を行った。このNPO法人は、新宿区まちづくり会議にも参加している。

これらのインタビューは、すべて2019年7月に行われ、インタビューの記録はすべてICレコーダーにて記録をした。

## 【研究対象地域の概要】

### (1) 大久保地域の概要

2020年7月現在、新宿区の在日外国人数は38,352人である。新宿区は現在、日本で1番外国人を多く有する自治体となっている。新宿区における外国人の出身国は、

中国出身者が一番多く、韓国・朝鮮と続く。地域別では、2011年の調査では大久保が一番多く、11,753人の在日外国人が住む。

1970年代より歌舞伎町の風俗店で働くため、中国人やフィリピン人を中心とした在日外国人も増加した。1980年代後半になると、歌舞伎町で働く外国人女性に加えて、留学生も多く集まるようになった。この背景に稲葉(2008)は、「大久保地域には語学学校や専門学校、特にコンピューター関係の専門学校が林立したため」としている。

## (2) 大久保における韓国系住民の増加

1990年ころからは、韓国食材を扱うスーパーも開店し、韓国料理店や、韓国の日用品を扱う店も増加した。中でも、1993年に職安通り沿い開業した韓国食材を扱うスーパーAの存在が、後のコリアタウン形成に大きく寄与したと藤巻(2009)などの調査でも明らかにされている。その後1995年には、日本で最大の規模となる淀橋協会が開設した。この背景には、韓国人のキリスト教徒の数の多さが考えられる。



図1 研究対象(大久保一丁目・二丁目の位置)  
(国土地理院 地図より筆者作成)

## (3) 観光地化の始まり

2000年に入ってから、新宿区大久保の多国籍なイメージによる観光地化が始まる。新宿区大久保は歌舞伎町という繁華街に近く危険な側面もあったが、人通りも多くなり、多国籍で観光地のような側面も持つようになった。

その後、2004年に放送された韓国のテレビドラマが人気となり、日本全体として韓国の文化に関心が集まるようになった。このころ新宿区大久保ではテレビドラマに関連したグッズ販売に加え、韓国関連の商品が人気となり、この現象はのちに「韓流」と言われた。

次に、韓国文化に注目が集まったのは2010年ころからの韓国人アーティストの日本進出である。韓国人アーティストによる音楽は多くの人気を博した。その結果、2010年の内閣府世論調査では韓国に「親しみを感じる」が61.8%を記録し、調査開始以降最高の数値となった。そのため、大久保通りから職安通りまで(大久保1丁目、大久保2丁目)には、韓国関連の店や韓国文化を紹介する施設が多く出店し、観光客で賑わうようになった。

## (4) 韓流ブームの低迷期

2012年ころより、韓流ブームに陰りが見え始めた。その背景には、2012年に当時の韓国の李明博大統領が竹島に上陸したことに始まる日韓関係の悪化が挙げられ、結果として、韓国に親しみを感じる日本人も減少した。内閣府(2016)の「外交に関する世論調査」によると、2010年は、韓国に「親しみを感じる」「どちらかという親しみを感じる」と答えた人が61.8%いたのに対し、2016年11月には38.1%にまでになった。

韓国に対する親しみの低下により、韓国をテーマとしたテレビ番組の放送は減少した。大久保でも韓国の商品を扱う店が多く撤退した。

2013年には、大久保でも在日韓国人に対する大規模なヘイトスピーチが発生した。また、差別的な落書きが書かれることもあった。

## (5) 現在の大久保

現在の大久保は、観光客数が若干の回復傾向にある。この背景には、2016年~2017年に日本デビューをした韓国人歌手のヒットが挙げられる。その結果、韓国に親しみを感じると回答した人は、39.1%と若干の回復をした。

また、この頃一度減少した客足を取り戻すため、「新大久保映画祭」などの企画も行われた。

2018年以降は、徴用工問題といった、日韓で外交上の問題が多く発生したが、新宿区大久保では、外交上の問題と韓国文化を別とする動きも見られ、引き続き多くの観光客を呼び込む地域となっている。その結果、2018年度と2017年度の乗客数を比べた。新大久保駅は6.7%増加となった。

## 【現地調査】

稲葉(2008)によると2003年当時に大久保通りと職安通りを結ぶ道において、韓国関連の飲食店や商品を扱う商店は31軒存在したとしている。

このような韓国に関連した商店は、2019年7月時点において筆者の調査では、43軒確認できた。その内訳は、飲食店が26軒、化粧品店が9軒、韓流を扱う店が8件である。つまり、韓国に関連した商店は、15年～16年の間に、1.4倍ほど拡大した。

## 【インタビュー調査】

### (1) 新宿区地域振興部多文化共生推進課

新宿区多文化共生推進課に対するインタビュー調査では、総人口における外国人比率が高く、外国人住民も多国籍化していることが分かった。その背景に、日本語学校の多さがある。また、新宿区は留学生が多いため、2年～3年で他の地域へ移るという「流動性の高い地域」である点についても触れられた。

多文化共生として行われた施策については、2016年度～2017年度の第3次実行計画では「新宿区多文化共生まちづくり会議運営」「新宿区多文化共生連絡会運営」「新宿区多文化共生実態調査の実施」「災害時における外国人支援の仕組みづくりの検討・実施」「外国にルーツを持つ子どもサポート施策の推進」であったが、2018年度～2020年度の「新宿区第一次実行計画」では、「外国にルーツを持つ子どもサポート施策の推進」が無くなり、交流・コミュニケーションの場の充実」が新たに加わった。

観光地化については、外国人集住地域の観光地化でいえば、大久保の混雑といった問題があるとしている。道路は混雑し、住民は困惑している。多文化共生推進課は、住民の声も聞いており、商店街の連携も含め、改善策を考案している。

多文化共生推進課のインタビュー内容をまとめると、次の3点である。①新宿区の外国人住民は留学生の比率が高い事から、流動性が高い点。②新宿区では外国人住民の交流・コミュニケーションの場の充実に重きを置いている点。③観光地化の弊害を認識し、住民の声を重視している点。

### (2) 文化観光産業部文化観光課

文化観光課では、新宿区大久保の観光地化による現状として、「大久保の混雑」が挙げられるとしている。その結果、大久保の従来からの住民による苦情も多発し、「住

民との共生」が求められている。区では、観光地化の前に、「区民の声を聴く」ことも行っている。他方、出店者側の問題としては、道に看板を出すといった「生活ルールが順守されない現状もある」。そのため、新宿区大久保として、「観光地としてあるべき姿」を考えていかなければならないとした。

新宿区文化観光課に対するインタビュー内容をまとめると、次の3点である。①文化観光課自身が観光地としてあるべき姿を考えていかなければならないと認識している点。②新宿区大久保は自然発生的に観光地化された点。③生活者と来訪者の交流の場として可能性を認識している点。

### (3) NPO 法人インタビュー

新宿まちづくり会議に参加している NPO 法人に対するインタビューでは、団体自身が新宿区大久保に対して、混雑などの弊害を意識している一方、K-POP に代表されるコンテンツ産業の定着と、経済的な観点からこれからの新宿区大久保の可能性についても述べられた。

NPO 法人に対するインタビューをまとめると、次の3点である。①団体自身が、大久保における混雑やゴミ散乱などの観光地化による問題や課題を認識している点。②新宿区大久保の観光地化は経済循環といった可能性がある点。③韓流というコンテンツはある程度定着がみられる点。

### (4) インタビューまとめ

以上の調査より、新宿区大久保は韓流を中心としたコンテンツに対する一定の需要が継続し、観光地と言える状況がある一方で、地域住民との共生の在り方に課題が存在することが分かった。今後の新宿区大久保としては、従来より住む住民との共生を意識し、コンテンツに対する注目から、住民の交流拠点への発展する「持続可能な地域の在り方」が求められる。

## 【新宿区大久保の考察】

### (1) コンテンツの定着

1990年ころからは、韓国食材を扱うスーパーも開店し、大久保は韓国人住民にとっての生活の場であったが、2010年頃では大久保に多くの韓国関連の商品を扱う商店が開業し、その後も K-POP の流行などにより、韓国の商品を扱う店が多く誕生した。

しかし、2011年～2012年頃にかけては、大久保の観光

客数では、政治関係に大きく左右され、一時期は観光客が減少した。政治関係が比較的良好な時は、韓国文化そのものに人気があり、外務省の調査でも好意的にみられる意見もあった。

しかし、今日では外交の影響を受けず、人気が継続していることが言える。2018年では、徴用工問題といった日韓関係の問題が山積みになった年でもあったが、その年の大久保地域最寄りである JR 山手線新大久保駅では、過去最高の乗降客数を誇った。2019年現在でも、多くの人の賑わいが見られる。

## (2) 多文化共生の現状

多文化共生の現状については、多文化共生推進課より、新宿区では、「人の出入りが多い地域である」ことが考えられる。新宿区の大久保・歌舞伎町周辺では、多数の外国語学校が存在し、学生の出入りも考えられることから、人の動きが多い地域であるといえる。しかし、多文化共生は「地元地域」との共生が図れてこそその実現だとしている。

また、前述の大久保の流動性の高さから、「地域のコミュニティに入らない」「数年単位で移動する」といった、問題が生じている。

区役所ヒアリングでは、交流の不足、NPO 法人でも地域のコミュニティに入らないという意見も聞かれたように、大久保では、多文化共生の取り組みはあるものの、依然として「交流不足」といえる現状がある事が分かった。

## (3) 観光地化について

新宿区では、区の公式ガイドブックより、「観光地」として扱われているものの、区役所ヒアリングより観光地かどうかは判断できず、「自然発生的」という事が分かった。区として、観光客誘致を積極的に行ったのではなく、結果として、観光地のような地域になった。NPO 法人においても、観光地かどうかは線引きが難しいが、観光地に起こりうるゴミなどの問題が、大久保でも発生しているという現状を聴くだけにとどまった。

以上のことから、大久保は、観光プロモーションを積極的に行った地域ではなく、「自然発生的な地域」であり、大久保を観光地としてとらえることについて、認識がさまざまなであることが分かった。

## (4) 今後の多文化共生の在り方について

新宿区大久保では、K-POP の流行や、日韓の外交問題など、外的要因を受けて発展してきた地域だと言える。し

かし、そのような外的要因により、急激な観光客の増加など、問題も発生してきた。

今後は、韓国文化への注目から、新宿区大久保を地域の交流拠点とする方法が考えられる。韓国文化は一定の需要があり、区としても交流を重視している中、訪問者とのつながりを強化し、より持続可能な国際都市としてのある方が考えられる。

## 【おわりに】

新宿区大久保の韓国人集住地域では、日韓関係に代表させる外交関係やコンテンツの流行等の外的要因により地域が変化をした。2020年以降は、新型コロナウイルス感染症により、さらに地域が影響を受ける可能性がある。

そのため、今後の外国人集住地域における観光地としては、地域の異文化を活かす一方で、地域の生活者にも目を向け、生活者と訪問者の双方に好循環となる持続可能な在り方が求められる。

## 【引用・参考文献】

ジョン・アーリ(1995)観光のまなざし—現代社会における レジャーと旅行 りぶらりあ選書

総務省(2006)多文化共生の推進に関する研究会報告書～市域における多文化共生の推進に向けて～

稲葉佳子(2008)オオクボ都市の力—多文化空間のダイナミズム 学芸出版社

藤巻秀樹(2009)移民列島ニッポン 藤原書房

内閣府(2010～2016)外交に関する世論調査

新宿区(2016)平成27年度 新宿区多文化共生実態調査

法務省(2019)在留外国人統計

東京都(2020)区市町村別国籍・地域別外国人人口

国土地理院 地図

<https://www.gsi.go.jp/tizu-kutyu.html>

JR 東日本

<https://www.jreast.co.jp/>